

山ノ上古墳(高崎市)

ここを右手に行くと山ノ上碑と山ノ上古墳があるようだ



ここを登って行く



更に石段を登って行く



途中の踊り場に説明板が立っていた



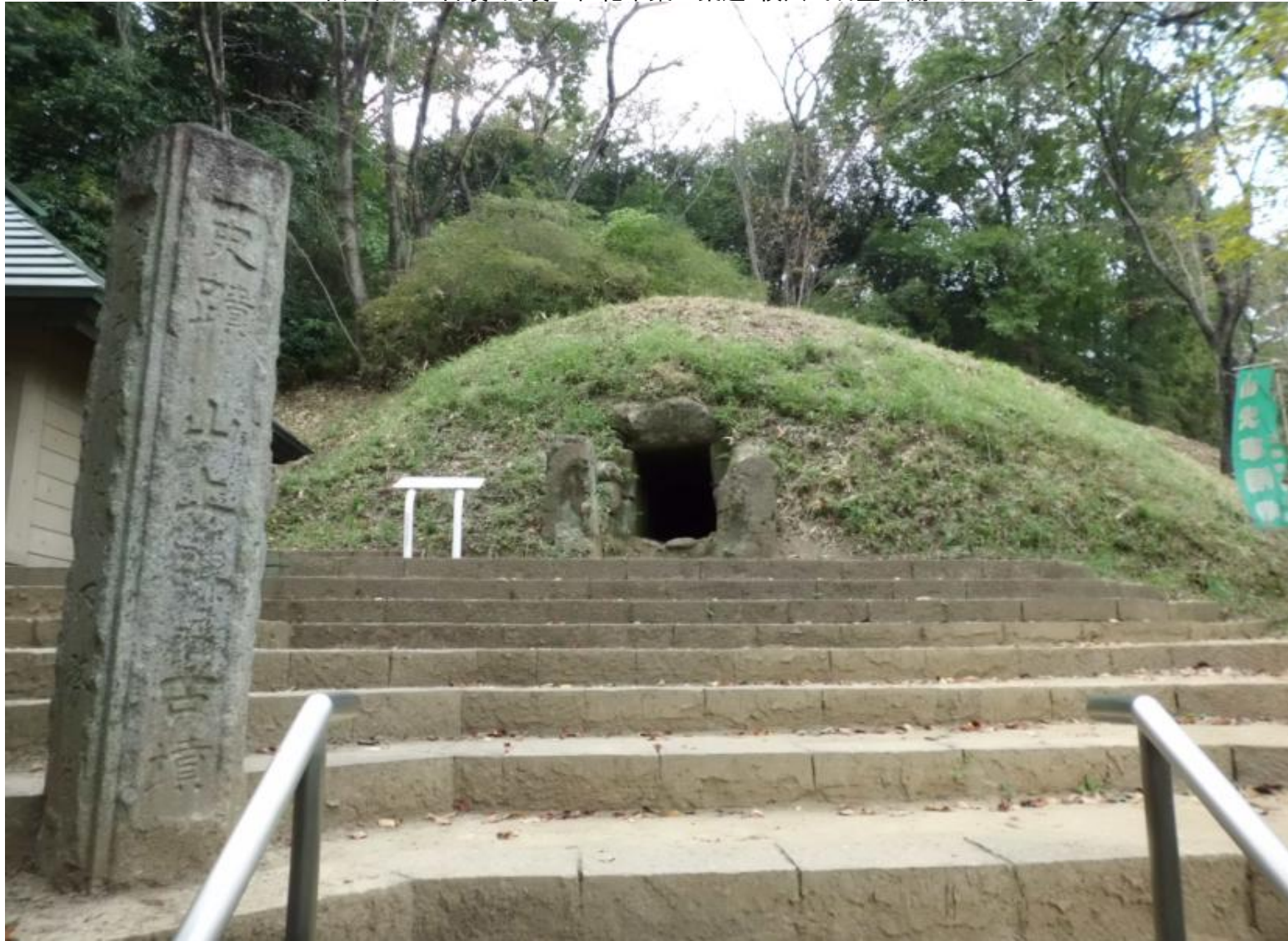
この更に上にある山ノ上碑の脇に山ノ上古墳があるが、その横穴式石室に建てられた窟堂(観音堂/馬頭観音が祀られている)について記されている



更に石段が続く



正面が山ノ上古墳/円墳/7世紀中葉の築造/横穴式石室が開口している



「史蹟 山上碑 古墳」と記された標柱



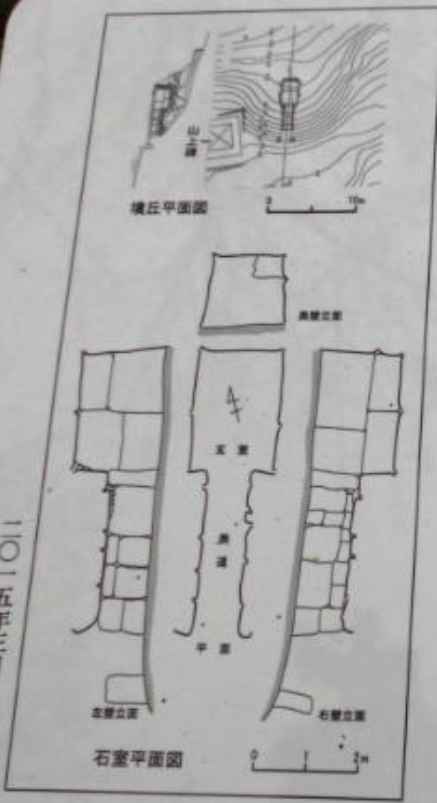
説明板がある



特別史跡 山上古墳 (やまのうさぎふん)
高崎市山名町二一〇四番地

本古墳は、七世紀中葉(飛鳥時代)に築かれた円墳であり、岩野谷丘陵東南端を流れる柳沢川の北岸に所在する。南斜面を掘り込み、本丘陵に産する凝灰岩の切石を用いた横穴式石室を設け、直径一五呎、高さ五呎の山寄せ式の墳丘を構築している。石室全長は現状で約六呎だが、羨道前端が改変されている。玄室は長さ二・七呎、幅一・八呎、高さ一・七呎、羨道は長さ三・三呎以上、幅〇・九呎、高さ〇・九呎を計測する。玄室の奥壁はほぼ一石、側壁四石、天井二石から成り、精緻に構築される。古くに開口したため出土品は不詳であり、石室内には中世の石造物が置かれている。

傍らにある山上碑の碑文から推定すると、本古墳は高崎市南部に置かれた佐野三宅(屯倉)の経営に連なる山名地域の首長の墓として完成し、その後辛巳年(六八一年)に祿者の黒壳刀自が追葬されるに際し、供養のため碑が建てられたとみられる。南東一帯の平野部にある山名伊勢塚古墳(前方後円墳・墳長六五呎・六世紀後半)に後続する首長墓だが、造葬地は丘陵部に移動し、終末期古墳特有の立地を志向している。本古墳のように、被葬者の名や葬送制度が推定できる古墳は日本でもきわめて希少であるため、隣接の山上碑とともに国特別史跡に指定されている。

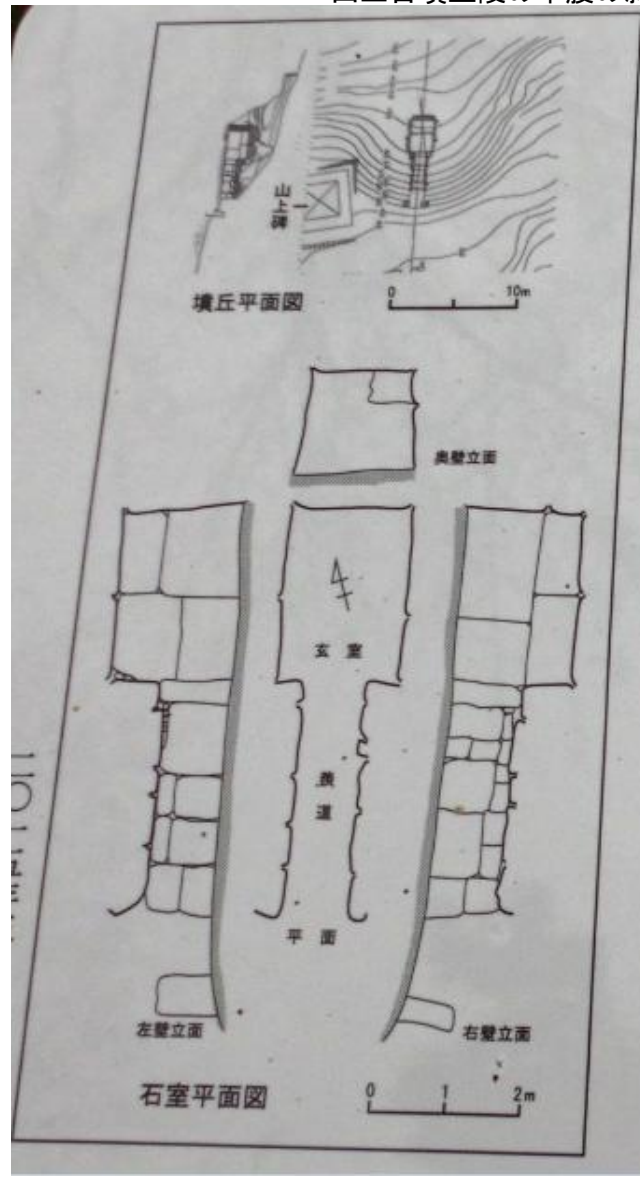


二〇一五年三月
高崎市教育委員会

特別史跡 山上古墳 (やまのうえこふん)

高崎市山名町二一〇四番地

本古墳は、七世紀中葉（飛鳥時代）に築かれた円墳であり、岩野谷丘陵東南端を流れる柳沢川の北岸に所在する。南斜面を掘り込み、本丘陵に産する凝灰岩の切石を用いた横穴式石室を設け、直径一五メートル、高さ五メートルの山寄せ式の墳丘を構築している。石室全長は現状で約六メートルだが、羨道前端が改変されている。玄室は長さ二・七メートル、幅一八メートル、高さ一・七メートル、羨道は長さ三・三メートル以上、幅〇・九メートル、高さ〇・九メートルを計測する。玄室の奥壁はほぼ一石、側壁四石、天井二石から成り、精緻に構築される。古くに開口したため出土品は不詳であり、石室内には中世の石造物が置かれている。傍らにある山上碑の碑文から推定すると、本古墳は高崎市南部に置かれた佐野三家（屯倉）の経営に連なる山名地域の首長の墓として完成し、その後辛巳年（六八一年）に縁者の黒売刀自が追葬されるに際し、供養のため碑が建てられたとみられる。南東一キロの平野部にある山名伊勢塚古墳（前方後円墳・墳長六五メートル・六世紀後半）に後続する首長墓だが、造墓地は丘陵部に移動し、終末期古墳特有の立地を志向している。本古墳のように、被葬者の名や葬送制度が推定できる古墳は日本でもきわめて希少であるため、隣接の山上碑とともに国特別史跡に指定されている。



山上古墳丘陵の中腹の斜面を削り、平らにして石室を造る「山寄せ古墳」と呼ばれる形式らしい

墳丘の右手を見たところ



墳丘の右後ろから前方を見たところ



これはそこから右手に墳丘の後ろ裾を見たところで、この道(右手)を進むと根古屋城址の方へ行くようだ



さて、これが横穴式石室の入口



羨道部から玄室方向を見たところ/両袖型/凝灰岩の截石切石積となっている



玄門の向こうが玄室/馬頭観音像(石段のところに説明のあった中世の窟堂として祀られたもの)が見える



山ノ上古墳の左隣にある山ノ上碑は、681年に立てられた日本最古級の石碑で放光寺(前橋市総社町の山王廃寺)の僧である長利が、亡き母の黒売刀自を供養するとともに、母と自分の系譜を記して顕彰したもので、この山ノ上古墳は黒売刀自の父の墓として造られ、後に黒売刀自を追葬(帰葬)したものと考えられている



特別史跡 山上碑及び古墳

所在地 高崎市山名町二〇四
 指定年月日 (史跡) 大正一〇(一九二一)年三月三日
 (特別史跡) 昭和二九(一九五四)年三月二〇日

■経文

平仁歳集月三日記
 佐野三宮定勝健守命孫黒売刀自此
 新川佐見多々孫足尾孫大兄臣孫生兒
 長利健母為記文也 放光寺僧

■現代語訳

平仁(平仁)年(天武天皇一〇年)西暦六八一年一月三日に記す。
 佐野三宮(佐野三宮)をお定めになつた健守命の子孫の黒売刀自(黒売刀自)が、
 新川佐見(新川佐見)の子孫の足尾(足尾)の子孫である大兄臣(大兄臣)に嫁いで生まれた
 子であるわたくし長利(長利)健母(母)の黒売刀自(黒売刀自)の爲に記した定められた文
 である。放光寺(放光寺)の僧(僧)。

■解説

山上碑は、群石(群石)安山岩(安山岩)の自然石(高さ一一一センチ)に五文字を刻んだもので、天武朝の六八一年に立てられた日本最古級の石碑である。放光寺の僧である長利が、亡き母の黒売刀自を供養するとともに、名族である母と自分の系譜を記して顕彰したものである。黒売刀自は、碑の傍らにある山ノ上古墳に埋葬されたと考えられる。碑文にある三宮(三宮)は、六世紀と七世紀前半に各地の経済的・軍事的重要地に置かれたヤマト政権の経営拠点である。佐野三宮は高崎市南郊の長川(長川)両岸(現在の佐野・山名地区一帯)にまたがって存在していたとみられ、健守命がその始祖に位置づけられている。碑の建立者である長利は、健守命の子孫の黒売刀自が、赤城山南麓の豪族と推定される新川臣(現桐生市の新川)の子孫の大兄臣(現前橋市の大朝)と結婚して生まれた子である。彼が勤めた放光寺は、「放光寺」の文字瓦を出した前橋市総社町の山王廃寺だと推定される。この寺は、皇国で最古級の寺院だと考えられ、発掘調査で判明している。当時、仏教は新来の先進思想であり、長利は相当な知識者だと考えられる。また、山上碑の形状は、朝鮮半島の新羅の石碑に類似しており、碑の建立に際しては渡来人も深く関わったと推定される。

なお、碑に隣接する山ノ上古墳は、精緻な切石構みの石室をもつ有力貴族の墓であり、七世紀中頃の築造と考えられる。その築造時期は、山上碑(六八一年)よりも数十年前古い。もともと黒売刀自の父の墓として造られ、後に黒売刀自を追葬(帰葬)したものと考えられる(白石太一郎説)。

以上のようにわずかに五三文字から、ヤマト政権と地方の支配制度、豪族間の婚姻関係や家族制度、地方仏教の浸透など多くのことを読み取る事が可能であり、山上碑が一種の古代史料であることを証明しているのである。



平成二三年二月二八日設置
 高崎市教育委員会

参考ホームページ

http://sgkohun.world.coocan.jp/archive/index.php/takasaki_yamaue/

http://kofunmoodys.fc2web.com/takasaki_3_yamana.html

<http://nordeg.web.fc2.com/shiseki/yamakohun.html>

<http://kofunnomori.web.fc2.com/gunma/takasaki/yama.htm>

<http://blogs.yahoo.co.jp/citizen8823/11221291.html>

<http://obito1.web.fc2.com/takasakiminami.html>

